

東西文明の比較 (19)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

最近、「日本」が世界的に注目されています。なぜ今頃？と常々考えていましたが、ようやくそのヒントが見つかりました。次の意見は、ハーバード大学卒で「日本」を研究しているパトリック・サングイネティ(ケンブリッジ大学大学院)の言葉です。

「私の専門は古代史ですが、古代史は何世紀にも渡って研究しつくされてきた学問ですから、1つの研究分野を掘り下げるという方法は限界にきています。ですから近年は、異文化との比較研究が盛んになってきているのです。ケンブリッジ大学の大学院では、

引き続き、日本について深く研究し、新たな文脈から古代史を研究していきたいと思っています」と。

独特の歴史文化を持つ「日本」は、比較文化の対象としてふさわしいとのこと。

以上は余談としておき、久しぶりで日本の歴史に戻りたいと思います。

日本の歴史が好きな方々にとって、「卑弥呼とは何者か」と「邪馬台国は何処にあったか」というテーマは、大いなるロマンを感じるのではないのでしょうか。文字のなかった当時の日本のことを「魏志倭人伝」(三国志の魏書東夷伝倭人の条)ほか、多くの中国の書物に描かれた事によって、私たちは「私たちの歴史」を知ることが出来ることを幸せに思います。

もっとも、その正確さにおいては、いささか疑問も有ります。それぞれの解釈があり、未だに結論が出ない事が多く、学術論争が続いていますがそこにロマンがあるのでしょうか。

卑弥呼とは何者か

従来、卑弥呼は神功皇后である、というのが一般的な推論でした。そこで別の推論をご紹介します。これはどこかの民放局の番組から得た説です。

それによると卑弥呼は「日女命(ヒメノミコト)」である。つまり「天照大神」のこと。卑弥呼は247年に亡くなっている。気象庁で調べると247年と248年に続けて日食があったという。卑弥呼の後を継いだ弟の代は世が乱れた。そして十三歳の台与がその後を継いだ。天岩戸神話にある乱暴者の「須佐之男命」の行状を見かねた天照大神は、岩穴に隠れ(247年)、翌年に台与が後を継いだ(248年)が史実ではないか。

卑弥呼は魏の皇帝から「親魏倭王」に任ぜられています。なぜ魏は、文化的には遅れていた倭の女王を、朝鮮半島の韓族の国々の首長より優遇したのでしょうか。そこには「遠交近攻」の策がありました。魏は倭と結んで呉を挟撃しようとしていたのです(この時代、倭の国はもっと南に位置していると考えられていた)。卑弥呼が狗奴国(邪馬台国の南に隣接した国)の卑弥弓呼(男王)との戦いで苦戦している折には、魏王は帯方郡の塞曹掾史(守備隊長)の張政を派遣して支援しました。

その張政は、その後も倭に滞在して卑弥呼が没した後の混乱を見守り、台与の代になり秩序の回復を見届けてから帯方郡に帰っています。余談ですが…三国志では魏によって滅ぼされた蜀のファンですが、卑弥呼を支援した魏には感謝! です。

仏教の伝来

7月号では、渡来人によってもたらされた様々な文化を述べました。それらの中で、精神的に最大なものは「仏教」伝来ではないのでしょうか。ご承知のように、インドで起った仏教の一派は、大乘仏教として中央アジアを経由して、紀元1世紀ごろに中国へ伝えられました。中国では4～5世紀に定着し、その後朝鮮半島に伝わり、多くの渡来人によって個別に伝えられていたようですが(日常生活を通じて)、公式には538年に百済の聖王によって倭に伝えられたといわれています。また、同時期には儒教や道教も仏教と混交しながら日本列島に流れ込んできました。

このあたりから、私が最大の関心を持つ「日本人の特性」と関わりを持つ事象が始まります。ここで私

が述べる「日本人の特性」を端的に言えば、「何でも採り入れて消化し、日本固有の文化にする」ということです。

「記紀」などに述べられている日本古来の「自然崇拜」を元とする「カミ」と外来の宗教などの精神文化がどう関わり、今日の日本人の「宗教観」になってきたのか、現代の世界でも宗教対立・民族対立が争いの「火だね」になっています。日本の歴史から得た教訓が少しでも、「平和の糧」になればと、念じていますが…。

倭・大和・日本

邪馬台国は、台与を女王にいただき、九州から畿内へ東遷したという説があります。遺跡の発掘成果にもとづけば2世紀前半までは九州の文化が先進的であるのに対して、2世紀後半になると、いわゆる畿内(ヤマト)の文化的要素が強くなるという事実があります。

畿内のヤマトは、古事記では「山跡・夜麻登」、日本書紀では「野麻登・夜麻苔・椰麼等」、万葉集では「山跡・山常・也麻等・夜麻登」などと書かれています。しかし、多くの古文献でヤマトは「倭・大倭」が使われています。古代中国の文献からの影響があったのでしょうか。

大和はいつ頃登場したのでしょうか。時代は進み、養老2年(718)に「大宝令」を改修してできた「養老令」に初めて登場します。

「日本」についてはどうか。古代では国号の「日本」と民族としての「日本人」は別個の問題でした。779年、奈良時代の朝鮮の歴史書「三国史記(新羅・高句麗・百濟)」によれば、国名は「日本」、朝廷の人々や種族名は「倭人」と記されていたようです。

中国の史書「旧唐書」には日本の由来について三説を記しています。

- ①「本国は倭国の別種なり。その国、日辺にあるを以て、故に日本を以て名と為す」
 - ②「自らその名の雅ならざるを悪み、改めて日本と為す」
 - ③「日本は旧小国、倭国の地を併す」
- また、中国史上唯一の女帝なのであった則天武后が

「倭国を改めて日本にした」と、唐代の書物「史記正義」にあります。

聖徳太子が隋の煬帝に贈ったとされる「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す…」を考えると、中国から与えられた「倭」でなく「日の本(ひのもと)」をつくり出した日本人は、前述した「日本人の特性」を如実に表した例だと思えます。また、中国王朝によって冊封^注された国が勝手に国名を変える事は許されませんが、冊封を拒んで、新国名を「日本」に改めたことは叡智だったと言えます。

災害や自然とのつきあい

「日本人の特性」で思い起こすことに、「災害や自然とのつきあいかた」があります。遙か昔の縄文人は、彼らを取り巻く自然と上手に付き合っていました。これを「自然との共生」と呼びますが、渡来人によって持ち込まれた弥生文化はどうだったでしょうか。

戦うこと、争うことを知っていた渡来人は、大地や自然の猛威とも果敢に対決しました。その相手は、水害・干ばつ・地震・台風・火災・獣害や病原菌などです。弥生人は、居住地や水田開拓を積極化しました。それを阻害する災害に抵抗することは当然と考えました。そうして灌漑施設をつくり、丘陵末端の谷や丘陵の縁など、地形に応じた給排水、水田の管理と適正規模を保つもので、技術的にも一定の発達を遂げました。そこには明らかに「自然と対峙」する姿があります。しかし、それにも限度が必要です。

周辺を見渡せば、近・現代の科学技術の発達は、いわゆる「自然を克服する」という西欧流の発想によるものです。さも目前に迫っているようなマスクミによる自動運転の「くるま」や「EV(電気自動車)」報道には、「自然をねじ伏せる」かの如き印象を覚えます。一方で、高齢者による「逆走」や「アクセル・ブレーキの踏み間違い」事故報道を見ると、「日本人の特性」を生かした予防する方法がないものか、真剣に考える昨今です。

■注

冊封：周辺の小国が歴代王朝に朝貢して主従関係を結び安堵してもらう。この制度は清朝まで続いた。日本では足利義満の時代を除けば冊封を受けていない。